

子ども教育

通信

教えるチカラがのびる授業
子ども教育で学ぶ

心理学



こんな心理学の授業があります

発達心理学I

運動能力やモノ・ヒトの理解など、様々な観点から子どもの発達を学びます。

発達心理学II

乳幼児期の詳細な発達の様子を知ること、子どもへの理解や支援法を考えます。

教育心理学

発達と学習の基本を踏まえ、効果的な教育法を学びます(発達心理学IとIIの復習)。

子ども家庭支援の心理学

子どもを取り巻く家庭の状況も踏まえた全体的支援について心理学的に考えます。

先輩の感じたこと

子どもをトータルに理解できる
保育者・教育者を目指して。



子ども教育学科
乙部貴幸 准教授

子どもの発達とはとても複雑な現象であり、時にそれは、織物のタテ糸とヨコ糸の交わり方で表現されます。タテ糸は、年齢に合わせた【身体、認知、社会性などの各機能の成長】を意味します。ヨコ糸は、【年齢段階ごとにみた各機能の状態】です。どんな子どもにも得意・不得意があり、大抵、タテ・ヨコの糸はきれいに織り成されていません。どんなふうに織り成されているか、発達を分析しながら育成することが求められます。さらに、現代では、子どもに大きな影響を与える家庭環境を把握し、支援することが求められています。子ども教育学科では、身体と心の発達を、その環境を含めて多様に見つめる知識と技術を習得し、子どもをトータルに理解できる保育者・教育者を育成します。



子ども教育学科2年
花山 紗季 | 金津高校出身 |

子ども教育学科3年
田中 瑞貴 | 敦賀高校出身 |

発達心理学II

一人ひとり異なる発達に、
目を向けること。

「一時期、発達が遅れていてもそれが大きな問題になるとは限らない、丁寧な観察と客観的視点が大事」という話が強く印象に残っています。子ども一人ひとりに向き合い、個人差に合わせて寄り添える保育士になりたいです。

子ども家庭支援の心理学

母親が相談する機会を、
いかに用意できるか。

保育士を目指す上で覚えておきたいのは、「産後うつ」の学びです。保護者の中には出産前後に多くの苦しみを経験している人もいるということに気づかされました。自分の常識にとらわれない視点で子どもの環境を見つめることが大事だと思いました。

子ども教育学科 アクションレポート!

学びの広がり、学内外に。ゼミ活動

い れ い
伊禮三之ゼミ

親子でワクワク! 算数・数学おもちゃ箱



遊びの体験を通して、
地域に算数・数学好きな子を増やす。



子ども教育学科
伊禮三之教授

算数や数学の考え方を使ったパズルやマジックなどの様々な遊びを、親子対象に企画。ものづくりフェスタなど地域イベントへの参加や公民館での独自開催、オープンキャンパスなど、様々な機会を通して展開しています。学生たちは、イベントづくりのノウハウや、子どもたちにわかりやすく教えることを通して教師としての力量形成につなげていきます。地域貢献のひとつとして親子の楽しい時間をつくるとともに、算数や数学を好きな子どもたちが増えることも目指しています。参加した親子からは、「子どもの目が輝いていました!」「家に帰ってまたやります」などの反響がありました。



- ◎絵柄をつくり、その周辺のパーツを組合せて四角形をかたどる「絵づくりパズル」
- ◎思い浮かべた数字を言い当てる!二進法の考え方を使った「数当てマジックカード」
- ◎わずかな角度で転がる、円形の型紙をかみ合わせた「ツースイクルローラー」など

わたしたちも参加しました /

法則はカンタン。でも、
カンタンに伝えるのが難しい。

子ども教育学科3年
南部 ひかる | 大野高校出身 |

取り扱ったのは、絵づくりパズルのジュニア・ポリオミノと組み木パズルのソーマ・キューブ。両方ともコツ(法則)がわかれば簡単にできるのですが、「子どもたちでもわかるように教える」となると難しかったです。当日は、算数や数学は苦手なのに、遊びに夢中になって取り組んでいる子どもたちの姿に驚きました。



わたしたちも参加しました /

さらに好きになってもらうために、
一人ひとりに合った声かけを。

子ども教育学科4年
北川 唯月 | 勝山高校出身 |

昔から数学が大好きで、ゼミが始まっていない1年次から活動に参加させてもらっていました。伊禮ゼミで行っている算数・数学の遊びメニューは、ひと通り子どもたちに教える体験をしています。イベント当日は、その子どもに合った声かけをして、より楽しんでもらえるような工夫を心懸けています。



仁愛大学開学20周年記念特別講演会

「尾木ママ流共感力~IQより人間力」

本学教員との鼎談も行われました。

2021年10月9日、教育評論家・尾木直樹氏を招いて特別講演会が行われました。「現代の教育ではIQよりも人間力が重視される」という尾木氏の講演の後には、パネルディスカッションも実施。子ども教育学科からは高野秀晴准教授がパネラーとして登壇し、「子どもを

頭ごなしに叱らず“どうしたの?”と共感的に接することが大事」「共感される経験が共感力を育てる」といった対話が展開されました。大学の今後という質問に尾木氏は、「学生の声を聞き、学生に共感することが大切。学生の中にはいろんなアイデアがある」と話しました。



高野秀晴准教授



尾木直樹氏